

文学と会社の間

馬 場 宏 二

経済小説やサラリーマン小説を論じようと云うのではない。また、半世紀ほど前に左翼文士の間で流行った、共産党の政治方針と自分の文学的自立性をどう折り合わせるかに悩む苦勞嘶の類をモジろうというのでもない。ここでは、このところ続けてきた、「会社」、「商社」、「社員」の用語史発掘の素材として、誰でも読んだことのありそうな近代小説の名作を活用しようというのである。純真な文学好きからは、山師擬いの冒瀆的な振舞だと叱られる惧れがあるが、それは甘受する他はない。

切っ掛けは、政治史家三谷太一郎氏の文¹⁾にあった。幕末の異才栗本鋤雲（1822～1897）が、森鷗外（1862～1922）の『澀江抽斎』にはその名で出てくるが、島崎藤村（1872～1943）の『夜明け前』には喜多村瑞見の名で出てくる、という指摘を含んでいた。本稿はこれに対する、いささか捻じれた反応だとも言える。

動力は無論私の関心の方にある。ここ三年ほど、「会社」等の用語史発掘に妙に執着してきた²⁾。『トリストラムシャンディ』によれば、人が何かに執着する動機には好奇心、時間節約、意地の三つの段階があるが、私はまだまだ好奇心段階にあるとは言うものの、ここまでやって来たのだからここで止めてしまえば今迄費した時間が無駄になると考える、時間節約意識がぼつぼつ生じつつある。鋤雲の名に感応したのはそのせいかも知れない。

鋤雲は、会社概念導入史上先駆的人物の一人である。菅野和太郎の名著『日本会社企業発生史の研究』³⁾に、海外渡航者で会社概念を持ち帰った人物として、まず小栗上野介が挙げられているが、ついで福沢諭吉、栗本鋤雲、吉田二郎、五代友厚、と出て来、渋沢栄一はそのやや後に出てくる。ここでは鋤雲は会社概念導入者のごく初期の一人という扱いであるが、その面よりも、別稿⁴⁾で指摘したように、経済活力の仏対英米間国際比較を、仮に情報源はカションらによる口伝だったと考えたにしてもそこに焦点を合わせ得て、それを正面から論じた初めての人としての面のほうが、その恐るべき具眼ぶりを鮮明に示すと言って良い。

だがこのたびの関心は、むしろ小栗上野介忠順（1827～1868）に関わるものであった。小栗はこの用語史上極度に重要な地位を占める。菅野が会社概念導入者の筆頭に挙げたばかりでなく、『広辞苑』は「商社」の創案者としてさえいる⁵⁾。こうした人物なのに、著述で残ったものは極端に少なく、また細部まで信頼するに足る伝記が全くない⁶⁾。ただ、伝記風小説類⁷⁾の中では幼少時から栗本鋤雲と親しかったことになっているし、長じて幕府内で重要な地位を占めるに

至った時に鋤雲とともに親仏派の中樞をなしたことは確かだから、鋤雲の側から小栗を照射することが出来ないかと考えた。ところが鋤雲自身の文章も残っているものはさほど多くはない⁸⁾うえに、小栗との交友関係を直接示しているものは案外少ない。小説であっても鋤雲に触れていればそこに有益な小栗情報が何らかの形で出て来はすまいか。…これが『夜明け前』を読み、『澀江抽斎』を再読した最大の動機だった。直接の期待は殆ど裏切られたが、ヨリ広い用語史については、予想外の収穫がいくつかあった。

1. 「夜明け前」の会社

実はこれまで『夜明け前』を読んだことがなく、読むつもりもなかった。若い頃に『破戒』『新生』を読んでその重苦しさから藤村を敬遠するようになり、あの長い『夜明け前』など無理に取っ付くまでもないと思うようになっていた。読んで見たら、今の私には大層面白かったし、雄大で緻密な歴史小説振りには敬服した。三谷氏の文に接しなければ手に取ることさえなかったかも知れないのだから、学恩に感謝せずばなるまい。

さて、当初は鋤雲と小栗がどう出て来るかを主関心にして、岩波文庫『夜明け前』全四冊⁹⁾を、頭から読むことにした。鋤雲こと喜多村瑞見は、すでに第一部第三章三で将軍家慶の病気に関する噂の出所として名前が挙がり、第四章三では現実に登場して、主人公青山半蔵の最初の上京期間中に、半蔵の師に当る宮川寛斎らと横浜で牛鍋を食べる「なかなかトボケた」人¹⁰⁾として好意的に描かれている。その後もこの人の名は結構頻繁に見え隠れするが、実は瑞見こと鋤雲が『夜明け前』を支えた度合いは、文面に登場した程度よりさらに大きかったのである。

これに対して、小栗上野介の名は全編で二度出て来るだけである。ひとつは第一部第十一章五にある、横須賀造船所設立に関して「土蔵付売家」との名文句を吐いた人として、もうひとつは第二部第五章五で、将軍慶喜が和平の意を表わすために免職した主戦派の頭目として¹¹⁾。いずれも有名な挿話だから、『夜明け前』が小栗忠順について新たな知見を加えたことにはならない。

喜多村瑞見の登場ぶりには、これと違って、単なる歴史叙述を越えるふくらみがあり、藤村の暖かな目さえ感じられた。これは何かありそうだと多少調べて見たら、藤村と鋤雲はいわば師弟関係にあった。青年藤村が、隠棲した鋤雲のもとに、もともとは漢学を学ぶために、出入りしていた¹²⁾のである。しかも後に藤村は、パリで鋤雲の『暁窓追録』を読みながらフランス便りを草している¹³⁾し、『夜明け前』の後にも、少年向け読物中にわざわざ鋤雲の紹介を含め¹⁴⁾、鋤雲の遺稿集の1943年版には序文を書いてもいる¹⁵⁾。因縁浅からぬものがあつたのである。若い頃に受けた薫陶が歴史知識を提供したばかりか、明治維新に関する歴史観を形成し、さらには『夜明け前』の創作動機自体がそこに胚胎していたかも知れないとさえ考えられるのである。

『夜明け前』には、小栗忠順や喜多村瑞見に関する箇所以外にも、細部で興味を惹かれる部分が多々あつた。中仙道馬込宿に視座を据えた歴史小説だが、一見明治維新史そのものと思わせるほど丹念な史実の探索を踏まえている。京や江戸の出来事も詳しく書き込まれている。私はもと

もこの辺りの史実には極度に疎い方だったが、「会社」用語史が維新前後の時代を中心とせざるを得なかったため、中途半端な贅肉的知識が溜まり始めていた。それに照らしても、この作品には有用な叙述が頻出する。山口駿河守直亮のことは全く知らなかったし、等持院の足利將軍像の首を切った人物¹⁶⁾が文面に登場するのにも驚いた。尊攘派の乱入で英領事パークスの初参内が中止されたことも初めて読んだような気がした。

関心が歴史に偏ったので、藤村がこの種の史実を如何にして擱んだかを知りたくなかった。その前にこの大作が果たしてどこまで歴史でどこまで小説であるかを噛み分ける必要があるが、私の歴史知識では史実の側から噛み分けることはできない。小説の側からではなおさら出来ないが、やや後に、この小説では、藤村の父母に当たる半蔵お民それぞれの不倫¹⁷⁾が全く描かれなかったことになるのに気づいた。実在した重要な事実を書かないという意味で、これは虚構である。してみるとこの作品は、純粹の私小説でもなさそうだが、歴史そのものでもありそうにない。

それでも藤村が、何を史料として史実に関するあれだけの知識を得たのかの、見当くらいはつけておきたくなかった。ところがもともと『夜明け前』も読まず、『藤村全集』¹⁸⁾の存在さえ知らなかったから、その第十五巻に、藤村が作った「夜明け前」創作準備ノートが含まれることなど全く知らずにいた。だから、そもそもどうすれば探索に入れるのかが思い浮かばない状態だったのである。

幸い手掛かりは友人中山弘正氏から与えられた。藤村出身校の明治学院で教えているのだから何か知らないかという乱暴な問い合わせに対して、大学には藤村研究組織はないが、学園に研究者がいると、お手許の『島崎藤村研究』誌一冊¹⁹⁾を贈ってくださり、併せて同誌の編者岩居保久志氏を紹介してくださった。岩居氏のご教示を含めて、鈴木昭一『『夜明け前』研究』²⁰⁾のような実証的史料研究など、さらに深入りする手掛かりがいくつか得られたが、もとより私は藤村研究者を志したわけではない。小栗に関する叙述がさほどのものでないとすれば、後は藤村と鋤雲との関係が判り、さらに広くは、作者が明治維新史上の諸史実をどのようにして知ったかの見当が着けば良かったのである。そしてその範囲の欲求は、鈴木昭一氏の上記の本によって、案外簡単に満たされることになる。

藤村にとって最大の史料は馬込宿に保持されていた「大黒屋日記」である。特に『夜明け前』第一部ではそうなる。このことは藤村研究者なら誰でも知っていることらしい。鈴木氏によれば、これに次ぐ史料は『伊那尊王思想史』、相楽総三関係の諸史料、『匏菴遺稿』、ケンペル『旅行記』、ハリス『口上書』である。

このなかで、京と江戸を舞台とする全国史的な史料といえば、当然に『匏菴遺稿』²¹⁾が中心になる。同書を見ると、匏菴こと栗本鋤雲は、外国事情として『鉛筆紀聞』と『暁窓追録』の二著を出し、また函館時代の回想記を書いた他には、纏まった長文としては「岩瀬肥後守の事歴」、「横須賀造船所経営の事」、「下ノ関償金の顛末」、「幕末の形情」の四つを遺しているだけだが、その四つ悉くが、家系上当然に継いだ奥医師を追放されながら結局幕府の重臣にまで陞った人物の見た幕府崩壊記なのである。そして鈴木氏の考証によれば、『夜明け前』の中には、「岩瀬肥後守の

事歴」と「幕末の行情」が、僅かの趣旨変更はあるものの、ほとんどはそのまま藤村の文章にパラフレイズされて、大量に取り込まれている²²⁾のである。

慶応元年の兵庫開港の際に山口駿河守が演じざるを得なかった悲劇的役回りについて、鋤雲は「幕末の行情」の中で、「老友山口氏の口吩を借りて」²³⁾詳説していた。藤村はそれを踏まえて、切腹寸前まで追い詰められた山口駿河守が中仙道を落ち延びて江戸に向かったことを描いている²⁴⁾。横須賀製鉄所設立に当たって、小栗上野介が、どうせ幕府が潰れるとしても幕臣としては立派なものを遺したいと「土蔵付売家」と述べた挿話は、鈴木氏も指摘するように「横須賀造船所経営の事」の中にある。この有名な挿話は、聞き手である鋤雲が書き遺したために、あるいは『夜明け前』出現以前から世に知られていたのではなかろうか。京と江戸の出来事の、すべてが鋤雲の文を下敷きにしているわけではないが、かなり重要な部分が『匏菴遺稿』に由来するように読める。

いずれにせよ、『夜明け前』の幕末維新史の記述が独自の歴史観を示し、史実の上でも新鮮な印象を与えるのは、鋤雲が若き藤村に与えた薫陶と『匏菴遺稿』に納められた諸文によるところが、通常考えられるより大きいのではなかろうか。そればかりか、藤村が鋤雲から十分吸収していないところさえ見受けられる。たとえば「下ノ関償金の顛末」は『夜明け前』の表面にはきちんと反映されていない。この文は幕府の財政窮乏を示すと同時に、鋤雲が外交交渉において発揮した辣腕を興味深く描いており、鋤雲びいきの藤村が取り込まなかったのは如何なる判断によるものが、かえって不思議なくらいのものなのである。「横須賀造船所経営の事」も、もう少し積極的に利用されて良かった。幕府の財政窮乏や勘定奉行小栗上野介の惨憺たる苦心が、もっと明示出来たはずだからである。総じて藤村は、鋤雲に依拠しているながら、この作品では小栗に注目するところが少ない²⁵⁾。幕府の財政窮乏自体には注目している²⁶⁾が、それが幕府崩壊の主要な一因だったとは考えていなかったのであろうか。

もう少し細かい点にも触れておく。『夜明け前』第一部第四章四に、幕臣岩瀬肥後守を高く評価した叙述があり、その下敷きが鋤雲の「岩瀬肥後守の事歴」であることは、鈴木説によるまでもなく疑いないことである。藤村は「瑞見に言わせると、幕府のことほど世に誤り伝えられているものはない」と述べ、以下しばらくは鋤雲のこの文の、かなり忠実なパラフレイズで自著数ページを埋めているのであるが、しかもその中には藤村の誤りさえ含む。

岩瀬忠震が抜擢した優れた人物の名が六人並び、そこはすべて鋤雲の遺稿どおりだが、蕃書調所に関わる人物としては箕作阮甫と杉田玄端を挙げるに留めている²⁷⁾。ところが鋤雲は「箕作阮甫、杉田玄端を挙げて蕃書調所の教官とし、儒官古賀謹一郎を漢儒にして傍ら横文字に渉るを以て其督となす」²⁸⁾と述べていたのである。茶溪古賀謹一郎(増)は、漢蘭両学を能くし、蕃書調所の設立を提案し初代の頭取となった、ここでは阮甫や玄端より遙に重要な人物である。しかも鋤雲は隠棲した茶溪を訪問してその父であり鋤雲の師でもある古賀侗菴の著書に感嘆し、また茶溪の日誌が的確であることを評価して幕末史のために公刊されることを熱望してもいる²⁹⁾。だから鋤雲は、古賀増の名を、その存在を強調する意味を込めて追い書き風に書いた。ところが半世

紀若い藤村は、時代感覚がないためであろう、鋤雲の文章の呼吸が判らぬままに、漢学者古賀謹一郎を見落としてしまったのである。

藤村の類似の誤りがそのすこし前にもある。「日本最初の使節を乗せた咸臨丸」³⁰⁾ がそれである。この一句の下敷きが鋤雲であるはずはなく、誰であるか今の私には判らないが、萬延元年に幕府が派遣した、小栗を含む訪米使節団は、米艦ポーハタンで太平洋を渡り、鉄道でパナマ地峡を越えて米船でワシントンまで行って大統領に会い、東海岸の主要四都市を訪れたのち、米艦ナイアガラで大西洋を越えて結局世界一周した。咸臨丸はそれに随行してサンフランシスコまで往復したに過ぎない³¹⁾。一体いつから正規の訪米使節団が忘れられ、「福沢諭吉が乗った勝海舟の咸臨丸」が歴史の主演になったのだろうか。これは反幕府的な明治政府史観のなせる業に違いない。おそらく藤村はこの叙述を常識として書いたであろうから、『夜明け前』準備中の昭和初期にはすでにこの歴史の捏造が強固な常識と化していたのであろう。彼のこの誤りは、そうした推測の根拠にはなる。

以上はしかし本稿の主題ではない。『夜明け前』を読んで見て、多少気になった論点を断片的に拾って見たものに過ぎない。本題はこの大歴史小説の終わり頃に、「会社」が二種類登場することである。

まず第二部第七章一に「陸運会社」が出てくる。維新の制度改革が街道交通にも及び、それまでの宿駅制度が廃されて、輸送を担当する組織は陸運会社になった、と言うのが作者藤村の言いたい趣旨である。これは明治六（1873）年のこととして述べられている。

もう一つは「中牛馬会社」である。第二部第八章七に、半蔵が、娘お糸の嫁入り仕度の運搬に、中牛馬会社を頼むのが良いかも知れない、と語っている。同じ明治六年である。さらに第十三章二には、明治十二年のこととして、「伝馬所にかわる中牛馬会社」という表現がある。同章三にも、「中牛馬会社の輸送に従事する…」という表現が出て来る。

気づいた「会社」はこれだけだが、これはこれで「会社」用語史探索をすこしだけ深める手掛かりにはなる。

「陸運会社」の文字は見た記憶があった。『法令全書』³²⁾ 明治五年正月十九日付の布達に「東海道筋駅々伝馬所並助郷被廢公私ノ荷物総テ陸運会社ニ於て継立方取扱候ニ付テハ云々」とあった（因に同年十月十七日付布達には「…三カ年の間郵便蒸気船会社へ委任致候条」とある）。これは政府が民間に「会社」を作れと指令した重要な一例である。営利企業を意味する語の用例として最初ではないし、営利企業としての「会社」の最初でもないが、先行した為替会社・通商会社は、商人が渋ったのを幕府が強制的に組織したのである。陸運会社も、それまでは特権的保護付の義務的用役だったのを、たとえ公務輸送であっても相対で条件を決めよ、と民営化の方向で条件の自由化を認め、担当組織を「会社」と名乗らせたのである。

『夜明け前』によって、その陸運会社が、この布達の翌年には中仙道にも出来たことが判る。ただその実体は全く判らない。もう一つの「中牛馬会社」。これは見た記憶が全くなかった。『夜明け前』の「陸運会社」が出てくる直前³³⁾ に「中馬稼ぎのもの」という語があるから、それと関

わるらしいと思ったが、用語自体を知らなかったのだから、それ以上判り様がない。

陸運史には全く触れたことがなかったから、友人の鈴木淳氏（東大文学部）や中西聡氏（名古屋大学経済学部）にお尋ねして、『維新期の街道と輸送』³⁴⁾を参照するのがよからうと教えられた。なるほどこれには、陸運会社のほか、中牛馬会社等も出てくる。これに加えて、岩居氏が『長野県政史第一巻』³⁵⁾および『南木曾町史』の該当箇所を示してくださった。『長野県政史』は『信州中馬の研究』³⁶⁾の著者古島敏雄が編者であるだけに、短文ながら明晰な叙述がある。

ここで、いささか乱暴だが上記の諸書の趣旨を大急ぎで要約してしまおう。在来の公的宿駅制度は明治二年二月に伝馬所と改称される（『法令全書』）が、民営化の方向での改革は明治三（1870）年から始められた。二次の改革案を経て、明治五年八月には宿駅制度が廃止され、各駅陸運会社が輸送の衝に当たることになった。明治五年以降には、陸運会社の他、郵便馬車会社、中牛馬会社、陸運元会社が相次いで設立された。陸運会社は半官半民的色彩が強く、問題が多かったため政府は明治八年にこれを解散させ、許可制の自由営業にした。その後も陸運会社の後身である内国通運会社が独占的地位を保った。中牛馬会社は、北関東甲信越地方に設立された。もともとこの地方では江戸中期以降「中馬稼ぎ」が広く行なわれて来たが、民間荷物付通しの主導権は中馬稼ぎ人よりも中牛馬問屋が握っていた。明治五年以降、それが中牛馬会社になった。明治十年代には、長野県では内国運輸会社と中牛馬会社が併存していたが、後者の方がやや優勢であった。…藤村が触れたのは、こうした変革の概要である。

藤村の陸運会社・中牛馬会社に関する叙述は極く短いものだし、そのまま全貌を示す史料として依拠出来る性格のものではない³⁷⁾。しかし、中仙道の歴史を書き込んで明治初期の地元の「会社」にまで筆が及んだ。それも、陸運会社は名前だけ、中牛馬会社は嫁入り仕度輸送を頼む現存する企業として、しかも後にもまだ生き残っている企業として出てくる。断片的ながらそれぞれに事態を正確に反映しているのである。これは馬込にあった記録を正確に写せばすむことかもしれないが、藤村が史実探索を相当誠実に行なったことを物語ると解することも出来るのである。

2. 『澀江抽斎』の社員

『澀江抽斎』（1916年作）は読んだことはあった。石川淳「森鷗外」³⁸⁾の名評も知っていたから、退屈極まる史実発掘だ、などと極め付けた覚えはないが、とはいえ、むやみに丹念な歴史探索だという印象は残っていたものの、筋書きはおろか挿話の類もあらかた忘れていた。実際、表面にはさほどドラマや感激のある作品ではない。作者の対象へのノメリ込みと、それを含む探索過程自身が面白いのである。

読み直す途中で、アこれは今オレが「会社」についてやっていることに似ているナと気付いた。無論、学識・執念・文章力、いずれもケタ違いだから、比較するなど恐懼の極みだが、共感したことは事実である。実際私も、偶然や思いつく限りの手掛かりや何人かの方々のご好意やをあらん限り利用して探索を進め、進める中で新たな問題に気付いて迂回し、良い史料を得て本筋へ戻

り、そうした過程を、知識を提供して下さった方々への感謝のつもりを込めて、過程自身に意味のあるものとして書き込んで来たのである。実際、ものを尋ねた友人の歴史家二人から、馬場さん段々鷗外の域に近づいているネと別々に言われたことがある。聞いた時には意味が解からなかったが、『澀江抽斎』³⁹⁾を読み直してみても、なるほどあれは、年長でシロウトの私がヨチヨチ歩きを始めたのに対する、好意的なヒヤかしだったのだなと納得した。これも再読の効用である。

『夜明け前』同様、このたびも直接の動機は鋤雲の存在を確認し、あわよくば小栗忠順を知る手掛かりを得ようとするものだったが、もっとあっさり背負い投げを食った。鋤雲の名は、中程の「その六十三」に、抽斎が毎月催した説文会のメンバーとして「喜多村拷窓、栗本鋤雲」と出てくる。「栗本鋤雲は拷窓の弟である。通称は哲三、栗本氏に養はるるに及んで瀬兵衛と改め、又瑞見と云った。嘉永三年に二十九歳で奥医師になっていた」⁴⁰⁾。これだけである。鋤雲は説文会の中でも若手の方だったように見える。医師でもなく鋤雲より五歳若い小栗忠順が登場するはずはない。

山師的探索は簡単に失敗した。ところが思わぬ副産物があった。前から気にしていた、新聞社の「社員」の用法が、鷗外への最大の情報提供者、抽斎の末子で跡取りの「保さん」の履歴の中に明示されていたのである。法の建前では、「社員」は法人の組織者であり運用者である。会社の場合、出資者が「社員」である。株式会社の場合は慣習から出資者が「株主」と呼ばれるに至った。ところが、歴史を端折って言ってしまうと、今では「社員」は会社に雇われて働きに行く者のことであり、労働法上の「労働者」である。法的建前と日常の実態のズレは「会社」の方にも存在するが、それは「社員」におけるズレの反映だから、「社員」のズレの方が目立つ。そのため、通常の辞書では「社員」にはこの二つを並べ、『法学辞典』の類では、一旦法の建前上の「社員」を述べた後に、わざわざ、これと日常語の「社員」とは違うと付け加えねばならなくなっている。しかも「社員」はこれだけでは済まなかった。

蘭学者が「会社」を創案したのであるが、当初はむしろ文化的知的集団のことであり、新聞社もこれに含まれていた(明治政府になってから共同出資の営利企業を「会社」と呼ぶようになったのである)。今日でも新聞社では「社」の用法にやや独特の含意を残している。そこでの「社員」となると、利益追求の主体ではなく、報道論説の主体の意味になる。そのことは、斎藤毅『明治のことば』⁴¹⁾では推測できるようになっている。だが、『日本国語大辞典』⁴²⁾によるとかえって混乱してしまう。同辞典は「社員」の説明を「会社の一員として勤務している人。また社団法人の構成員」と併記し、用例として、法人の構成員に当たる事例を三つ挙げたのち、漱石『三四郎』を挙げるのである。この小説では「社員」は末尾近くに一度だけ出てくる。広田先生の長い独白のなかに「与次郎は社員に知ったものがあるから…」とあり、この「社員」は明らかに新聞記事を左右出来る立場の人間のことである。この用例は不適切であり、典拠が有名な小説であるだけにミスリーディングである。「社員」に少なくとも三義あって新聞社の「社員」は日常語とはまた別に説明されねばならないことを示しておかねばならなかった。とは言え、同種の辞典も、この第三の「社員」を別記してないのが普通である。『澀江抽斎』が、図らずもそこを説明して、辞典類

の欠を事実上補ってくれたことになる。

すなわち『澀江抽斎』「その百三」に「保は嶋田三郎，沼間守一，肥塚龍等に識られた。後に京浜毎日社員になったのは，比縁故があったからである」とあり，「その百八」には，「保は比年六月に京浜毎日の編集員になった。これまでは其社と只寄稿者としての連繋のみを有してゐたのであった。当時の社長は沼間守一，主筆は嶋田三郎，会計係は波多野伝三郎と云ふ顔触で，編集員には肥塚龍，青木匡，丸山名政，荒井泰治の人々がゐた。又矢野次郎，角田真平，高梨節四郎，大岡育造の人々は社友であった。」とある。「その百三」の「社員」は「その百八」の「編集員」と同義である。

ここは澀江抽斎が生きていた時代のことではなく，鷗外が探索し執筆した第一次世界大戦期の，僅か前の時代の用法を示していると云って良からうから，明治末から大正初期，1910年前後には，新聞社の編集員級の人物は「社員」と呼ばれていたことになる。そういえば漱石の『三四郎』執筆が明治四十一年（1908）年である。

因に、『澀江抽斎』には「会社」も僅かに出てくる。初めのころの「その四」に，これも情報提供者の「飯田巽」さんが出てくる。「飯田さんは，素と宮内省の官吏で，今某会社の監査役をしている」。終わり近くの「その百一」に，保と東京へ同行した山田が「衆議院議員に選ばれ，今は某銀行，某会社の重役をしてゐる」。同じ「その百一」に，澀江家に寓した藤村義苗が，「東京高等商業学校に入って其業を卒へ，現に某々会社の重役になっている」。私が気付いた「会社」，「社員」の用例はこれだけだが，鷗外では「会社」に関わる人は高学歴者・上流階級である。高等商業→会社，というコースもある。この関連は後に見る漱石にも出てくることに注意しておいて良い。

3. 『猫』の会社，『行人』の会社

夏目漱石（1867～1916）の主要作を纏めて読んだ。突然文学づいたわけではなく，栗本鋤雲や小栗忠順を探すつもりではなさらぬ。正直に云うと，「会社」の建前語と日常会話語の区別が，改めて気になりだしたからである。

「社員」に二義あることは，既稿「会社と社員」⁴³⁾のころから気になっていた。辞書類にもたいてい二義出ている。ところが，現在ではこの二義性を反映して，「会社」の方も二義ある語として使われている。さらに厳密に云うと，「会社」には字義ないし古義つまり蘭学者による創案時の語義もあるから，三義あることになる。ところが辞書には，たいてい建前語の「会社」しか出てこない。『広辞苑』は珍しく二義載せているが，①が商行為またはその他の営利行為を目的とする社団法人といった建前語であり，②が同人の会・学会という古義である。最も多用される「会社へ通う」といった類の，勤め先，集団労働の場という日常会話語の語義は，辞書には出てこない。そこが改めて苦になったのは「会社の由来」⁴⁴⁾を書いてからである。字義ないし古義が建前語の語義に切り替えられたのは明治政府の作為のせいである。建前語と日常会話語が分化したのは何時からだったのだろうか。改めて漱石を読んだのはそれを知る手掛かりを得たかったためである。

本格的な調査としては、ジャーナリズムか大衆小説を時代順に追うべきかも知れなかった。あいにく慣れていないことで、時間がかかりそうであった。もっと手っ取り早い方法はないか、研究会や若い同僚との対話の際に相談してみた。「漱石はどうか」という声はいくつかあった。なるほどこれなら扱えそうである。そこで、多彩な語彙と鮮やかな文体、初期には一作ごとに作風を変え得た豊かな文才を堪能しながら、ついでに「会社」の用例を拾って見ることにした。以下はその要約的な報告である。

現行の『漱石全集』には総索引⁴⁵⁾が付いており、これに「会社」も一応拾われている。ところがこれは拾い方が極めて粗く、漏れが多すぎて本稿では役に立たない。この「総索引」では、漱石の長篇小説のうち、「会社」を含む作品は『行人』と『明暗』の二篇、「会社の監査役」が『行人』、「会社の役員」が『野分』、「会社員」が『彼岸過迄』にあるから、「会社」は都合四編中に、多少広義に拾っても計十回出てくるに留まることになっている。またこれと別に「鉄道会社」、「保険会社」、「電燈会社」、「人造肥料会社」も拾ってあるが、それらを合計しても十二であるから、「会社」の出現は総計で二十余りとなる。ところが、私が久しぶりの漱石に堪能しながら、これと同様な範囲の用例を拾ってみた限りでは、『二百十日』を含む長編計十五の中には「会社」は六十回以上出て来る。しかも私は視野狭窄で注意が不徹底になることがあるから、これでも漏れを残している惧れがあり、七十回に達するかも知れない。付け加えれば、漱石の作品にはこの他に単なる「社」が結構出てくる。これは営利企業としての会社の意味の場合と、新聞社や出版社等、古義の「会社」に近い場合と双方に使われているが、いずれにせよ出現頻度は相当高い。だが索引はこれを全く拾っていない。

さて個々的に見ると⁴⁶⁾、『坊っちゃん』、耽美的な『草枕』と『虞美人草』には「会社」はなかった。但し、『虞美人草』には「社長と株主」が冗談の中で出て来⁴⁷⁾、株主の方が上である。予想外なのは『坑夫』と『二百十日』に「会社」がなかったことである。後者はまだしも、前者は会社が酷使している労働者を描いているのである。労働者世界はまだ「会社」の内ではなかったことの反映かも知れない。『三四郎』は「社員」の用例として辞書に挙げられていたわけだが、これとは別に「電燈会社」⁴⁸⁾が出てきた。

面白いことに、すでに『吾輩は猫である』に「会社」が結構出ていた。文字数で数えれば十四はある⁴⁹⁾。中心は、飼い主苦沙弥先生の近隣の富豪、金田の「会社」である。娘の縁談で訪れた金田夫人鼻子が、「宿が…会社の方が大変忙しい」と云うのが皮切りで、「会社でも一つじゃないんです、…どの会社でも重役なんで」と云う。後に同じ用件で先生宅を訪れる旧友鈴木藤十郎君はこの金田君の股肱で、会社の方は教師と違って忙しいなどと云うが、かつて先生の書生をしていた多々良三平君は、この鈴木君のことを、遠慮の意味を込めて「大頭」と呼ぶ。その多々良君は、「法科大学を卒業してある会社の鉱山部に雇われている」が、彼はまた「六井物産会社の役員」である⁵⁰⁾。ここはいささか話の辻褄が合わない。このままでは多々良君は鉱山の或る職と六井物産の役員とを兼職していることになるし、いくら法学士が希少価値だった時代だといっても、就職後一年で月給三十円、社内預金が五十円になったばかりの新入りが大商社の役員になれるは

ずはない⁵¹⁾。ここは、泥棒に盗まれた山芋の送り主である多々良君が、犬を飼えば良いのに役立つ猫がいるだけだから盗難に遭う、私にくれば私が猫を食うと、書生気分を丸出しにしたところを一層可笑しくするために、多々良君を出世させ過ぎた筆の滑りが齎した論理破綻であろう。頭脳明晰な漱石は滅多に破綻を起こすようなことはしないのだが、「昔なら素町人」の実業家世界を代表する「会社」のことなので、つつい推敲が疎かになったのではないか。さてその多々良君は、先生に法科をやって会社か銀行に入れば金が溜まると勧める。この他『猫』には、「保険会社」や「保険社員」まで出てくる。「会社」は、ここでは漱石の嫌いな、成金・金持ち等俗物の組織である。俗物の金持ちが会社を作り、会社で金を儲ける。ただ、漱石が描くのは高学歴者の世界だから、その中の俗物となると会社に関わって登場することになる。

俗物世界である「会社」に対する嫌悪は、同様にまだ東大在勤中に書いた『野分』に、もっとはっきり出てくる。この小説が、自分が街鉄値上げ反対運動に加わったと噂された体験を踏まえているだけに、よけいはっきり出たのであろう。主人公の貧乏学者白井道也が学校勤めをしくじった越後には石油会社があり、会社の役員は金持ちで勢力のある紳士である。それを論難したのがしくじりのもとだった。この作品には「会社」は都合九回出てくる⁵²⁾が、前段では全て清貧の白井道也を迫害している。後段になると「道也の兄は会社の役員であり、其会社の社長は中野君のおやじである」⁵³⁾と、必ずしも敵対的ではなくなるが、この小説の山場は、白井道也が思いもかけぬ雄弁で演説会場を沸かせ、「学問は学者になるものである。金になるものではない。学問をして金をとる工夫を考えるのは北極へ行って虎狩をする様なものである」⁵⁴⁾との名文句で金を欲しがる俗物を罵倒するところなのである。

その後の作品で「会社」が多数登場するのは、まず『それから』である。十一回はあり⁵⁵⁾、他に「会社員」も単なる「社」もある。主人公代助の父・兄の会社等、金持ちが所有し支配する会社と、銀行をしくじった友人で三千代の夫平岡が働き口として探す会社、勤め人としての「会社員」、それに汚職事件を起こした会社、など多様に出てくるので登場回数が増えた。また、平岡がやっと勤めたのが新聞社だが、これについては「社に出る」といった略称が、当然のように用いられている。ここですでに「会社」の用法が膨らんで来た⁵⁶⁾。半年後に書き始められた『門』は、御米との結婚の経緯からして社会に背を向けて隠棲しようとしている小役人の野中宗助が主人公であるにもかかわらず、「移転会社」、「日本に沢山ある会社」、そして「会社員」と三回は出てくる⁵⁷⁾。「会社」が一般の市民生活に近い存在になった現れである。なおこの作には「嫁の里がある会社員で有福な生計をしている」⁵⁸⁾とあるから、ここでは「会社員」はまだ安サラリーマンのことではなかった。出資者が経営者か、いずれにせよ社内で支配的地位を持つ者の意味であろう。さて、次作『彼岸過迄』では「会社」の登場は最大限数えても五回⁵⁹⁾と少な目だが、これと別に「社則」とか「社の倶楽部」とか、今日風な用法が出ている。

その次の作『行人』では「会社」の登場は計八回⁶⁰⁾だが、その用法に特色がある。それはほとんどが「岡田」に関わる。岡田はかつて、主人公である「自分」の親のところで書生同様に暮らしたが「高商を卒業して一人で大阪のある保険会社へ行ってしまった」⁶¹⁾人間である。一応高学

歴だが主人公のような帝大出ではなく、会社も所有し支配しているのではない。勤めているのである。だから「会社へ出勤」、「同じ会社へ出る人」、「会社を午で切り上げて」、「会社の方を丸ごと休んで」とサラリーマン語になる。この作品にはなお「腰弁」なる語も出てくる。「自分」が「君の会社」の方へ行こうと言うのも、勤め先を指す今日風の用法である。因に、こうした勤める側の用語としては、少し前の『それから』辺り以降、「会社へ入る」、「銀行へ入る」、「新聞社に入る」と就職する意味で「入る」が使われ、「会社へ出る」、「社へ出る」「会社を退ける」と出退勤の意味で「出る」「退ける」が使われている。ともあれ『行人』まで来て、漱石の中に、金持ちが作る「会社」と会社員が勤める「会社」の区別が明確になって来、辞書にある建前語の「会社」と、辞書にない会話語の「会社」が分化し始めた。1912年末、明治が終わり、大正が始まるころのことである。言葉に敏感な漱石のことだから、この辺りで、世間一般で「会社」が建前語と会話語に分化したことを反映していると見て良いのではないか。

次の『道草』では「会社」の出現は十二回にはなる⁶²⁾から、多い方だが、これは主人公健三の姉婿が安サラリーマンとして勤める「会社」と、山師的な実業家である細君の父が作ろうとし、あるいは大株主から鉄道会社の社長の口を提供されたとか保険会社の顧問の口があったとか吹聴する時の「会社」とが併存するからである。この区分も『行人』の場合と同様である。

次の『ころ』は内面描写に徹した作品だが、それでも「会社」は一度だけ出て来た。後段の主人公「先生」の財産を横領する叔父が「いくつもの会社」に関係している⁶³⁾のである。遺作となった『明暗』では、「会社」は計五回登場する⁶⁴⁾が、三回までは主人公津田が勤める会社のことである。この会社のことを単に「勤め先」とも呼んでもいる。津田は高学歴に見えるが、社内で支配的地位にいるわけではない。有力者とのコネでやや有利な地位にいる高級サラリーマンと言ったところである。『行人』の岡田と大差はない。むしろ岡田と大差ない地位を、本来岡田より高尚な人間であるはずの津田が占めるようになったことが、日本会社社会の変容を示しているとも言えよう。

『吾輩は猫である』が世に現れ始めたのが1905年初、『明暗』が途絶したのが1916年末である。その間丸十二年。「会社」の用法の変遷を歴史的に映すには、漱石の寿命はいささか短過ぎたが、この期間はしかし、日本における会社企業体制の確立期ではあった。漱石の作家活動は、まことに良い時期に行なわれたとも云えるであろう。

註

- 1) 三谷太一郎「幕末政治家栗本鋤雲とその維新後」“up” 336号, 2000年10月。
- 2) この主題による拙稿を執筆順に並べれば以下のごとくである。
 1. 「会社と社員」大東文化大学経営研究所編『日本企業の建前と実態』1999年1月刊 所収。
 2. 「福沢諭吉の会社論」大東文化大学『経済論集』第73号, 1998年10月。
 3. 「『会社』の探究」大東文化大学経営研究所 Research paper No. J-31, 1999年12月。
 4. 「〈会社〉論その後」大東文化大学『経営論集』第1号, 2001年1月。
 5. 『商社・会社・社員』大東文化大学経済研究所 Working paper No. 19, 2001年1月。

6. 「会社の由来」『学士会会報』第八百三十号, 2001年1月。

7. 「会社論補足三題」大東文化大学『経営論集』第2号, 2001年8月。

以上に示した「会社」等の語原・語義史探究の大筋については上掲『商社・会社・社員』1～3ページを見よ。

- 3) 菅野和太郎『日本会社企業発生史の研究』1931年, 岩波書店。
- 4) 上掲拙稿「会社論補足三題」
- 5) 小栗「商社」創案者説は, 慶応三年(1867)の「兵庫開港に付商社取建方並…」なる文書に由来するようだが, 既に萬延元年(1860)中に「商社」を用いた文書があるのだから, この説は成立しない。参照, 馬場上掲『商社・会社・社員』12ページ。
- 6) 参照, 上掲拙稿「『会社』の探究」15～17ページ。
- 7) 星亮一『小栗上野介』1996年成美堂出版, 10ページ, 大島昌宏『罪なくして斬らる』1994年新潮社, 学陽書房人物文庫95ページ, 『幕末開明の人小栗上野介』1994年東善寺, 56ページ。なお, 坂本藤良『小栗上野介の生涯』1987年講談社は一応歴史書であるが, 小栗と栗本の幼少時の交友を述べている(82ページ)。しかし坂本が下敷きにした海音寺潮五郎『幕末動乱の男たち上』(1976年新潮文庫)には幼少時の交友は描かれておらず, そこで海音寺が依拠した鋤雲の「横須賀造船所経営の事」にも幼少時のことは全く出てこない。これは坂本の勇み足であろう。したがって, 栗本・小栗の幼少時の交友という話は, あり得ることではあっても, 今のところ明確な物証がないと言わざるをえない。
- 8) 日本史籍協会編『匏菴遺稿一, 二』1900年, 同覆刻版1975年, 東京大学出版会。
- 9) 島崎藤村作『夜明け前』岩波文庫, 全四冊, 1969年。
- 10) 同上, 第一部上134, 177ページ。
- 11) 同上, 第一部下286ページ, 第二部下160ページ。
- 12) 藤村が初めて鋤雲を訪れたのは明治二十五年二十一歳の時, 鋤雲七十五歳であった。安藤璋二「藤村と函館」『島崎藤村研究』第26号, 37ページ。
- 13) 「フランスだより」中「街上」, 岩波文庫『藤村文明集』1988年, 85ページ以下。
- 14) 『力餅』(1940年)第三章五「栗本先生」, 筑摩書房『藤村全集第十卷』1967年 所収。
- 15) 栗本瀬兵衛編『栗本鋤雲遺稿』1943年, 鎌倉書房。
- 16) 暮田正香の名で出てくる人物。本名は角田忠行らしい。中島明『信州佐久・小県の「御一新」』2001年, 信毎書籍出版, 30ページ。
- 17) 「西丸四方「島崎藤村の秘密」1966年(筑摩書房『現代日本文学体系13 島崎藤村(一)』1968年所収)。これによると半蔵つまり島崎正樹の相手は「腹違いの妹由伎」で近親相姦にもなる。鈴木昭一『『夜明け前』研究』25ページでは, 由伎は半蔵の義母の連れ子だとしているから父が異なることになりそうであり, この場合は単なる不倫になる。
- 18) 『藤村全集』全16巻, 1968年, 筑摩書房。
- 19) 前掲『島崎藤村研究』第26号, 1998年9月。
- 20) 鈴木昭一『『夜明け前』研究』1987年, 桜楓社。
- 21) 日本史籍協会編, 前掲『匏菴遺稿一, 二』
- 22) 鈴木前掲書, I-六。
- 23) 前掲『匏菴遺稿一』146ページ。
- 24) 『夜明け前』第一部下第十一章四・五, 岩波文庫, 215～232ページ。
- 25) 『力餅』(『藤村全集』第十卷)や『栗本鋤雲遺稿』の「序文」では藤村は小栗に言及している。なぜ『夜明け前』で二つに留めたのだろうか。栗本の「幕末の形情」は, 江戸へ戻った山口駿河守を翌晩小栗が訪ねて話を聞いたところで終わっていたのだが, そこは取り入れられなかった。

- 26) 半蔵ら三人の庄屋が、参勤交代復活と対応して、道中奉行に定助郷設置の嘆願に行き、四カ月待たされた挙げ句、願いは聞き届けない、ただし救助金として一宿三百両下し置くが、これは回し金として利子のみ使うように、と言われて帰ってくるころがある。第一部上第九章三。岩波文庫103～114ページ。いかにもシミッたれた処置であり、幕府の財政窮乏を中仙道村役人側から描いたものと言って良い。
- 27) 第一部上、岩波文庫183ページ。これと別に132ページには蕃書調書の翻訳に阮甫と杉田成卿が関わっていると述べられており、事実はそれで正しいが、下敷きは不明である。
- 28) 前掲『匏菴遺稿一』85～86ページ。
- 29) 前掲『匏菴遺稿二』484, 586ページ。
- 30) 『夜明け前』第一部上、岩波文庫172ページ。
- 31) とりあえず、前掲拙稿『「会社」の探究』16ページを見よ。
- 32) 『法令全書』
- 33) 『夜明け前』第二部上、岩波文庫、286, 287ページ。
- 34) 山本弘文『維新期の街道と輸送』1972年、法政大学出版局。
- 35) 古島敏雄監修『長野県政史第一巻』1971年、181～182ページ。
- 36) 古島敏雄『信州中馬の研究』1944年、伊藤書店。
- 37) 維新前の制度についてもどこまで資料となし得るか疑えるところがある。藤村が伝馬助郷制度を正確に理解していないと言う批評がすでに『夜明け前』第一部完結当時であり、藤村はこれに全面的に承服している。田村栄太郎「『夜明け前』の史的考察」『都新聞』1931年1月19～21日、(前掲『藤村全集別巻』) vs 藤村「田村栄太郎氏が『夜明け前』の史的考察に接して」同紙1月24日～25日(『藤村全集』第十三巻)。なおこの応酬の存在は、岩居保久志氏の御好意によって知り得た。
- 38) 石川淳「鷗外覚書」、ここでは角川文庫版『森鷗外』を挙げておく。
- 39) 以下、『現代日本文学全集7 森鷗外集』1953年、筑摩書房による。
- 40) 同上書、316ページ。
- 41) 斎藤毅『明治のことば』1977年、講談社、264・265ページ。
- 42) 『日本国語大辞典』小学館、1972～76年刊。
- 43) 前掲拙稿「会社と社員」
- 44) 前掲拙稿「会社の由来」
- 45) 『漱石全集』、1994～95年岩波書店、全29巻。総索引はその28巻目にある。
- 46) 以下諸作品は、筑摩書房刊『夏目漱石全集』別巻所収の、井上百合子編『漱石年譜』を基準に配列した。
- 47) 『虞美人草』岩波文庫版、336ページ。
- 48) 『三四郎』岩波文庫版、29ページ。
- 49) 『吾輩は猫である』岩波文庫版、以下頁-行で示せば、103-6, 103-8, 103-9, 150-6, 187-18, 192-18, 195-11, 195-16, 196-2, 392-14, 393-4, 393-7, 393-7, 393-15。
- 50) 187ページと192ページ。ここは話が一連である。
- 51) ましてやこれは三井財閥のイメージである。「会社の鉱山部」は三井鉱山であろう。だから、多々良君の地位は一層あり得ないことである。この点はこれまであまり問題にされたことがないようだから、特にしつこく取り上げてみた。
- 52) 『漱石全集第三巻』、以下頁-行で、261-8, 261-8, 261-9, 261-9, 262-4, 400-3, 411-12, 411-12, 415-4。他に単に「社」となっている箇所が六つあるが、こちらはすべてが営利企業の意味ではない。
- 53) 同上書、411ページ。
- 54) 同上書、435ページ。

- 55) 岩波文庫版『それから』, 以下, 頁-行で, 29-11, 31-3, 71-14, 212-10, 212-11, 212-17, 213-2, 213-11, 163-7, 210-4, 210-9。
- 56) 因にこの作には「交際社会」なる語も現れる。同書98ページ。「社交界」はまだ使われていなかったのだろうか。
- 57) 岩波文庫版『門』, 16, 50, 118ページ。
- 58) 同上書, 118ページ。
- 59) 岩波文庫版『彼岸過迄』, 48, 67, 72ページ, 他に「会社員」二度。
- 60) 岩波文庫版『行人』, 以下頁-行で10-15, 17-9, 17-14, 17-17, 21-1, 22-15, 91-8, 100-10。
- 61) 同上, 10ページ。
- 62) 岩波文庫版『道草』, 以下頁-行で, 19-4, 53-3, 53-5, 68-10, 158-5, 208-1, 210-16, 210-17, 211-11, 211-18, 213-4, 262-12。
- 63) 岩波文庫版『ころ』152ページ。
- 64) 岩波文庫版『明暗』, 以下頁-行で, 73-11, 257-2, 296-10, 441-19, 516-12。